

ダビデの人気を妬んでサウル王は、彼を殺そうとしたが、ダビデはサウル王の許から逃亡して、大胆にもイスラエルと敵対しているペリシテ人の町ガトに亡命しようとしたが、怪しまれて成功しなかった(21章)。

ガトを出て逃れたのが、「アドラムの洞窟」であった(22:1)。そこにダビデを慕ってダビデの両親を始め400人の者たちが集まった(22:2)。彼らは死海沿岸の「要害」(現在のマサダの砦)に一時立て籠もったが、「預言者ガト」の忠告に従って以前隠れていた「アドラム」の近くの「ハレトの森」に移動した(22:5)

### I. ケイラの人々の裏切り(23:1～14)

その時ダビデは「ペリシテ人がケイラを襲い、麦打ち場を略奪している」(1節)と聞き、2度神に託宣を求めた上でペリシテと戦い、ケイラの住民を救った。然るにケイラの住民はダビデに感謝するどころか、サウル王にダビデがケイラの町にいる事を知らせた。

一方ダビデも警戒を怠っていなかった。ケイラの人たちが自分をサウルに引き渡すことを探知して、間髪を入れずケイラの町を後にして、「あちこちをさまよった」が、この時にはダビデに従う兵が600人に膨れていた(13節)。

その「あちこち」とは、「あちこちの要害」「ジフの荒れ野の山地」(14節)であった。それは不安な日々であった。

### II. ヨナタンの慰問(15～18節)

その後、15節以下に2つの大きな出来事があった。一つは親友ヨナタンが突然、訪ねて来て励ましてくれた事であった。

これはケイラの人々の裏切りの後だけに、どんなにダビデを励ましたことであろうか。そのヨナタンの励ましとは、父サウルの手が及ぶことはない事と、次に王になるのは自分ではなく、ダビデであると約束したことであった(17節)。それが口約束でないことは、「主の御前で契約を結んだ」(18節)ことによって分かる。

ヨナタンはバプテスマのヨハネが、「あの方(イエス)は栄え、私は衰えねばならない」(ヨハネ3:30)と言った事に等しいのである。

### III. 分かれの岩(19～28節)

ダビデの試練は更に続く。「ジフの荒れ野の山地」(14節)に来たダビデに対して、ジフの人々の裏切りであった。そこでダビデ一行はマオンの荒れ野に移った(24節)。そこは、大きな岩場のある所で、ダビデ一行はその岩場の一方の側に隠れていた。しかし、サウル側にはその情報が伝わっていて、サウルは今度こそはダビデの逮捕を確信した。

しかし、事態は急変した。サウルはペリシテ人がイスラエルに侵入したとの情報を受け、急遽その場を離れた。そこで、ダビデが隠れていた岩は「分かれの岩」と呼ばれた(28節)。ダビデは危機一髪、難を逃れた。神はダビデの側にいて彼を守られたからである。